

江戸・東京 地域トリビア 其二

伊能忠敬は定年後の生き方の参考になるか？

古地図を考えると、直ぐに浮かんでくるのが伊能忠敬です。江戸時代に自分の足で歩いて日本地図を作った人として教科書にも載っているのです、知らない人はいないでしょう。

忠敬は江戸深川ゆかりの人です。隠居後江戸に出た時の住居が深川黒江町(現在の江東区門前仲町一丁目辺り)で、旅に出るときは必ず富岡八幡宮にお参りして道中の無事を祈ったそうです。



現在富岡八幡宮の鳥居のそばに、出発前の旅姿をした銅像が立っています。これは忠敬測量開始200年祭の翌年(2001年)に多くの人々の浄財によって建立されたものです。

簡単に忠敬の人生を振り返ると、延享二年(1745年)千葉九十九里の小関村という所の名主の家に生まれ、17歳で佐原の大商人の伊能家に婿入りしました。伊能家は酒造業を中心に広く事業を行っていましたが、忠敬の代で事業として大きく成功し、家業を伸ばして財を蓄えました。現在佐原に伊能家の旧家が残っており、立派な伊能忠敬記念館があります。

49歳で息子景敬に家督を譲って隠居し、寛政七年(1795年)江戸に出て、幕府天文方高橋至時(よしとき)に弟子入りして学問の道に入りました。

最初は地球の大きさを知ろうとして、寛政十二年(1800年)55歳の時に蝦夷地探索(北海道調査)を名目に、日本地図作成の旅に出ました。3年がかりで北海道までの太平洋側の沿海地図を作成しました。その後文化十三年(1816年)まで、足掛け17年間、全10次に渡って測量の旅をして日本全国を歩きましたが、合計3万5千キロ、4千万歩も歩いたということです。(井上ひさし

さんの小説に「四千万歩の男」があります)

文政元年(1818年)年地図の完成を待たずに数え年74歳で亡くなりましたが、その二年後至時の息子景保らの努力で完成し、「全日本沿海輿地全図(ぜんにほんえんかいよちぜんず)」として幕府に献上され、以後はこの図が日本地図の基本になっています。大図、中図、小図、正本、副本、写本、複写本等に分かれており、各所に残されていますが、合計214図でできた伊能大図は、原図は正本、副本共に消失してしまって、複写本のみ残されています。

隠居後に大きな事業を成し遂げた忠敬は、「中高年の星」とも言われており、「人生二山」などと第二の人生の見本といわれています。人生50年の時代に第二の人生を全うして大事業を成し遂げた忠敬と比べ、今の時代は人生80年、多くの人が20年以上もの長い第二の人生を過ごすことになります。

最近安倍首相が講演の中で忠敬に触れて「忠敬のように諦めない強い意志があれば、どんな困難な課題も乗り越えられる」と述べたと新聞に出ていましたので、世間の関心も高いように思われます。

定年後や定年間近に第二の人生に踏み出して、新しい事業や地域活動などを始めた方もおられますが、忠敬の生き方のどんなことが参考になるだろうかと考えて見ました。

★次の目標に向かって、愚直なまでに真面目で地味な努力をし続ける。

17年間で3万5千キロも歩いて日本全図を作成しましたが、今の価値観では想像できない大事業です。第一の人生や仕事を全うした後に、次の目標を設定し、それに向かって愚直なまでの努力をし続ける、忍耐、根気と正直、その上合理的、科学的な発想、地に足の着いた生き方など挙げればキリがありません。

忠敬ほどの結果を出すことは難しいですが、目標を設定して、諦めずにやり続けることはできると思います。ただ無理はしないことです。

★何か社会に役立つことをする。

忠敬は何か社会に役立つことをしたいと思っていたようです。最初は北海道までの地図を作成する程度で、日本全図を作ろうとは思っていなかったようですが、幕府の保護もあって最終的

には日本全国の地図を作成することができました。地図を作る作業に自分の財産をだいぶ使っています。「後世に役立つ地図を作りたい」との思いと「名を成したい」との実業家としての功名心もあったでしょう。

第一の人生は自分の家(仕事)と家族のため、第二の人生は世のため、人のため、少しは社会に役立つことをしたいものです。

★本当にやりたいこと、好きなことを楽しんでやる。

佐原で商家を営んでいる間も天文学や数学などを勉強していたようですから、勉強自体が好きであったと思います。また、「隠居の慰み」と自ら言っていたようですから、やはり好きなことをしているという意識が強かったと思います。

定年後は趣味やボランティアに精を出すのもよし、何か仕事を成すもよし、20年あればもう一つできます。

好きなことをやる、これは封建時代よりも現代の方がやり易いのではないのでしょうか。

★素直に若い人に教えを乞う。

至時の教えを受けて天文学や地理を学びましたが、師との歳

の差は19歳、事業で大きな財を成した人でありながら、若い師から暦学・天文学を学ぶ謙虚さと柔軟さも持っていたと思います。

定年後に第二の人生を踏み出すとき、ほとんど師となる人は年下でしょう。これは大変参考になります。

伊能忠敬に触れて、第二の人生の生き方を考えて見ました。忠敬ほど大きな事業を成し遂げるのは、どうも凡人では難しそうですが、少しでも参考にしたいものです。

城東・江戸文化研究所 しんじ